HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	探究と論証 : アリストテレス『分析論後書』B1-10における諸相
Author(s)	日吉, 大輔
Citation	哲学, 41, 1-19
Issue Date	2005-07-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35030
Type	departmental bulletin paper
File Information	41_RP1-19.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学哲学会『哲学』41号（2005年７月）

探究と論証 ―アリストテレス『分析論後書』B1-10における諸相―

日吉 大輔

1 はじめに

『分析論後書』[1]（以下『後書』と略記）B巻においてアリストテレスは、探究の方法について述べている。その探究論は、学問的知識（epistêmê）という理想的な把握のあり方にもとづいて、探究項目の区別と認識の秩序を明らかにし、何であれ探究するということの構造を普遍的に説明する。『後書』B巻の第1章から第10章までは、探究論が構築されるべく、定義（horismos）と論証（apodeixis）との関連が議論される。彼の探究論は論証を通じて「何であるか」を明らかにするものと特徴付けられるが、当時の状況においては「何であるか」を明らかにする定義と根拠を明らかにする論証とは方法上の緊張関係にあり、いくつかの困難を乗り越える仕方でアリストテレスは自ら探究論を提示する必要があったのである。

彼の探究論およびその構築プロセスにとって、中心となる考え方は次の二つである。「探究されるものは全て、中項の探究であるということは明らかである[2]」そして「『何であるか』と『何故にか』とは同じであるということは明らかである[3]」というものである。前者においては「中項 to meson」という語によって、探究プロセスに推論を導入する意図が明示されており、後者においては、根拠（aition）を明らかにする論証と、事柄そのものを明らかにする定義との

関連が示されている。

本稿において私は、『後書』B巻における探究論構築のプロセスの解明を企て、上の二つの考え方相互の関係をB1-10の文脈において明らかにしたい。また特に後者、「何であるか」と「何故にか」との同一視については、これが当該文脈の中でどのような重要性を持つのかを評価したい。というのも、それはB1-10の中で四回くりかえし述べられており、議論の主要な展開点に位置付けられているからである。

2　探究論の導入：B1-2

アリストテレスは『後書』B巻冒頭において、探究される事柄を区別している。われわれが探究する事柄は次の四項目であるとされる。すなわち「事実 to hoti」「理由 to dioti」「あるかどうか ei esti」「何であるか ti esti」である。またこれらの間には探究上の秩序が認められ、二つの探究ルートが提示される。「事実」を知って「理由」を探究するルートがある一方で、「あるかどうか」を知って「何であるか」を探究するというルートがある。

「あるかどうか」→「何であるか」

「事実」→「理由」

二つのルートは、ひとつの項によって端的に問われるか、それとも「AがBに属する」というように二項に分節された仕方で問われるかという違いをもっている。アリストテレスの例示に従って、われわれが「月蝕」を対象として探究

しているとしよう。月蝕の何について探究するのかは上の四項目が与えてくれる。そこで、「月蝕があるかどうか」あるいは「月蝕とは何であるか」と単一項でもって問うているとき、われわれは端的な探究ルートの上にいる。他方で、「月は蝕を受けるかどうか」や「何故に月が蝕を受けるのか」と主語述語の二項でもって問うているとき、われわれは部分的な探究ルートの上にいる。これら二つのルートは表現上の違いにすぎないのかもしれないが、アリストテレスは二つの探究ルートを統一的に捉える視点を与えている。

第一に「事実」および「あるかどうか」という項目に対して、「あるということ hoti esti」という表現を彼は与えている。その上で「事実」の把握は部分的であるとされ、また「あるかどうか」の把握は端的なものであるとされる。この区別は、実際に探究対象が端的な事物すなわち実体であるのか、それに帰属するような属性であるのかという形而上学的身分の違いに依存している。しかし『後書』においては、実体／属性区分の判定基準は与えられず、われわれの探究のあり方に焦点が当てられる。

また第二の視点は論証という方法である。アリストテレスは「『事実』と『あるかどうか』は中項があるかどうかということであり、『理由』と『何であるか』はその中項が何であるかということである」と考え、中項という語によって探究プロセスに推論（syllogismos）を導入する意図を提示している(89b37-90a6)。ここで中項とはアリストテレス三段論法理論の術語であり、前提命題を構成するために不可欠なものである。『後書』B巻冒頭で彼が「探究されるものと、われわれが学知する限りのものは数において等しい(89b23-24)」と述べ、学問的知識を探究の目標と定めて問いと応答との間の対応を確認していることからみても、アリストテレスが探究というものを中項の探究と特徴付けていることは、とりわけ学知獲得へのひとつの条件として重要な観点を表わしている。[4]

さらに第三の点は「何であるか」と「何故にか」との同一視である。「何であるか」はソクラテスの常套とした疑問形式であり、端的に事物そのものを問うものである。他方で、「何故にか（dia ti）」は、アリストテレスによって先の

「理由」項目と明らかに同定されており、事柄の根拠を問うものである。双方とも疑問詞がそのまま術語化されており、問いと応答のやりとりに即した表現であると言えるだろう。「何であるか?」と問われて得られる適切な応答と、「何故にか?」に対するそれとが同一であるということは、ひとまず、具体例によって示されている。アリストテレスによれば、「月蝕」とは「地球の遮蔽による月からの光の欠如である」が、何故に月が蝕を受けるかと言えば「地球が遮蔽して光が欠けてゆくから」である(90a15-18)。語の配列が異なるとはいえ、同じ事象を述べているこの事例が二つの探究の同一視をよく示している。しかし一般に、事柄が「同じ」であるということについては、何をもってそう主張するのかの評価が難しい。

そこで、第一と第二の視点を援用して考えることはできるだろうか。すなわち、実在に依拠して同一を認めるか、あるいは論証という適切な認識のための実質的な手段に依拠して同一を認めるということができるだろうか。おそらく前者は形而上学的な問題であろうし、後者は認識論的な問題であろう。アリストテレスの基本姿勢としては適切な認識というものは事物のあり方に依存するのだが、ここで彼がとった道が後者であったということは『後書』B巻の議論の流れから明らかであろう。そして「何故にか」の探究に対する論証の実質的な有効性については『後書』A巻において議論され、アリストテレスが既に必要な準備を持っているものと理解するべきであり、他方で「何であるか」の探究に対して論証がどのように関わるかということがB巻の議論に期待されるべきである。したがって「何であるか」に知識が認められるならば、論証という方法にもとづいて同一性を理解することは、応答の適切さを評価するという点で実質的である。

しかしながら、論証導入の考えと「何であるか」と「何故にか」の同一性との関連について、B2のテキストはまた別の視点をも提供しているように見える。すなわち、その同一性の故に、探究に対する論証導入が帰結するというものである(90a5-15)。この視点はB8においても維持されており(93a3-9)、B1-10の議論において二つの探究の同一性が最も基

礎的な主張であることを表わしている。改めて定式化すれば次のようになるだろう。

(a) 探究されるものは全て、中項の探究である。

(b) 「何であるか」と「何故にか」とは同一である。

そして、これら二つの関係について、(a)の故に(b)が成り立つという考え方と、(b)の故に(a)が成り立つという考え方の双方をテキストは支持する。

だが、これは議論の循環を示しているのだろうか？　あるいは、そうでなければ、これら二つの考え方が主張されるとき、何か複数の視点がアリストテレスの念頭にあるのだろうか？　この問題を考察することは、事柄を証明するということが、われわれの探究にとっていかなる点で跳躍台となり、またいかなる点に依拠しているのかということに関わる。そこで私は、(b)が語られる場面に焦点を当て、B8およびB10の当該箇所を参照して、同一性が語られる局面を特徴付けたい。そのときB2,8,10の三章で語られる同一性はそれぞれ固有の特徴を持つであろう。もしそうならば、(a)によって表わされるところの論証との関連は、語られる局面に応じて理解を企てるべきであると私は考える。

3　探究論における定義と論証：B8-10

上の定式(b)すなわち「何であるか」と「何故にか」との同一性主張は、B2において二回、そしてB8とB10において一回ずつ述べられる。これが単なる繰り返しでなければ、議論の展開をたどることによって、手掛かりが得られるかもしれない。特にB8-10はアリストテレスの探究論が積極的に語られる箇所である。私は彼の探究論を確認しながら(b)が述べられる箇所を調べたい。

そこで、われわれが主張したように、「何であるか」を知ることと「あるかどうかの根拠(aition tou ei estin)」を知ることとは同じであるから（だが、それについての説明は次の通りである。すなわち、何らかの根拠があるということ、そしてそれが同じものであるかそれとも別のものであるか、もし別のものであるならば、論証可能なものであるか論証不可能なものであるかのいずれかである、ということである）、さらにもし別のものであり論証することが可能であるならば、根拠は中項であることと第一格において証明されることは必然である。というのも、証明されるものは普遍であり述語付けられるものだからである(B8, 93a3-9)。

B2において「何故にか」と表現されていたことが、この箇所では「あるかどうかの根拠」と表現し直されている。さらにこの同一視は「何らかの根拠があること」という説明を受けている。「根拠」に言及することで、根拠と帰結という事物の因果構造に訴え、われわれの認識の秩序を確立しようという意図がうかがわれる。そして、この観点は特にアリストテレスの論証という方法と密接に関連する。というのも、彼にとって論証こそが根拠を根拠として普遍的に認識させる方法だからである。

他方で、B10においては次のように言い表わされている。

実際、定義のうちのひとつの定義(horos)は既に述べられたものであるが、別の定義は何故にかを明らかにする説明言表である。したがって、前者は意味する一方で証明せず、後者は「何であるか」の論証のようなものであり、配列において論証とは異なることになるということは明らかである。というのも、何故に雷が起こるかを述べることと雷とは何であるかを述べることとは異なるからである。というのは、一方は「雲の中で火が消されるから」という仕方で述べるのにたいし、雷とは何であるか？　雲の中で火が消されることによる音響である。したがっ

て、同じ説明言表(ho autos logos)が異なる様式で語られており、一方の様式では連続的な論証なのであるが、他方の様式では定義なのである。さらに、雷の定義は雲の中の音響であるが、これは何であるかの論証の結論である。また、無中項の事物の定義は、何であるかについての論証不可能な定立である(B10, 93b38-94a10)。

「何であるか」と「何故にか」との同一性について、今度は、「同じ説明言表が語られている」という説明がなされている。先の「何らかの根拠があること」と共に、二つの探究ルートを結び付けるような観点が提示されていると見えるが、「根拠」と「説明言表」とは同じ事柄を言い換えているに過ぎないのか、それとも何か別の観点から「何であるか」と「何故にか」という二つの探究ルートの重なり合いを表示しているのか。ともあれ、ここではひとまず異なる表現がなされていることを確認するに留めて、彼の探究論の中で論証が「何であるか」と「何故にか」の探究とをどのように結び付けているのかを観ておきたい。

アリストテレスの探究論はB8において「月蝕」および「雷」の具体例と共に積極的に語られる。理論的な側面として彼は次の二つの条件を提示する。第一には「何であるか」や「何故にか」に対する存在把握の先行性が挙げられる。B1-2において提示された二つの探究ルートとその秩序が、B8でもまた確認されるわけだが、今度はさらに「あるということ(hoti esti)」から「本質(to tiên einai)」へというルートが提示されている。これはおそらく第三の途というよりも、むしろ二つのルートを一般的に表現したものであろう。既に見たように「あるということ」という表現は、存在の把握に関して端的に語られるものと属性とともに語られるものとを一般化したものであったことから、このルートは少なくとも、実体であれ属性であれ探究の対象となる限りのものを普遍的に捉えていると思われる。

B8における彼の語り方は、われわれの探究の項目とプロセスとを区別し分類するだけではなく、区別された事柄を積極的に結び付けてゆくものである。そこで第二の条件として、存在把握の「何であるか」への関連性が挙げられる。

この条件によって彼は、存在を把握する段階に対して、さらなる把握の可能性を認める場合とそうでない場合の二つに区別する。「事柄そのものについての何か(ti autou tou pragmatos)」を得ている場合、すなわち「何であるか」という問いの応答となる充全な定義に関わる何らかの特徴を存在の把握の段階において得ているときには、われわれは「何であるか」の探究への準備ができている。そして定義全体を形成するべく、適切なひとつの説明言表を求めるのである。だが他方で、たまたまそうであるような特徴を得ている場合われわれの存在把握は十分ではないとされる。このときは探究が「何であるか」の適切な把握に結び付いて行かないことになる(93a21-29)。

アリストテレスはこれら二つの条件にもとづいて、論証を通じて「何であるか」を明らかにする途を描いている。適切な探究は、存在の把握段階とその根拠の把握段階を持つが、彼は双方を把握している場合と、存在を把握しているが根拠は把握していない場合とを述べている。前者においては適切な第一の根拠が得られており、次のような論証が成り立つ。

[前提] 光の欠如は［あらゆる場合に］地球の遮蔽に属する。
[前提] 地球の遮蔽は［あらゆる場合に］月に属する。
[結論] 光の欠如は［あらゆる場合に］月に属する。

ここで結論命題は「月が蝕を受けている」あるいは「月蝕がある」という、事物の存在を表わしている。月蝕とは月に帰属する何らかの光の欠如である、という把握段階が表現されているだが、さらなる特徴は前提命題に表わされる。すなわち「地球の遮蔽」を根拠とし、それによって引き起こされる事象としてこの論証は根拠-帰結連関を示している。この論証が提示される観点としては、成功した探究の立場から語られていると理解されなければならない。というのも、

この論証が拠り所としているのは、実際にこのような仕組を持っている事象そのものだからである。そこで、このようなとき探究者は対象の存在と「何であるか」を得ているとされるが、段階を経て把握されるだけでなく、存在と「何であるか」とが同時に把握されるという場合をもアリストテレスは認めている(93a35)。[5]

しかし、第一の根拠が特定されていないときには、存在は把握されながらも「何であるか」は把握されていない事態が生じる。彼が提示している例によれば、「われわれとの間に何もないのに影を作り出し得ないこと」を根拠として提示する場合である。こちらの方はわれわれに共通な認識の仕方を拠り所として事物の存在を得ているに過ぎない。[6]

ここで、適切な論証による存在の根拠の把握は「何であるか」の把握と同定されている。というのは、論証を構成する要素が「何であるか」を明らかにする定義形成の素材になるからである。適切な論証が得られれば充全な定義形成まであと一歩である。このことは、月蝕の充全な定義が「月蝕とは、地球の遮蔽による月からの光の欠如である」ならば、一見して明らかであろう。だが、そのわけは、定義というものがどのように彼の探究論の中に位置付けられるかの考察を要請する。というのも定義がいかなるものであるかに応じて、論証との関連の仕方も特徴付けられるからである。

アリストテレスはB10において、定義を次のように四種に区別している。[7]

(1)「何を意味するか」を明らかにする説明言表
(2)事物が何故にあるかを明らかにする説明言表
(3)「何であるか」の論証の結論
(4)「何であるか」についての論証不可能な定立

語の意味としての定義は、直接的に論証との関連が認められないが、定義項と被定義項との同義性を理解するために

探究論に組み込まれるべきものである。[8]

また、(2)から(4)は論証構造との関連で語られている。(2)と(3)では前提と結論が区別され、(4)は論証系列における第一の原理を表わしている。これはB9の議論から導かれたものであり、言わば科学の出発点となるものである。B9の議論とは、探究論において語られる「何であるか」が、証明されない原理としてのものと、証明されるべき派生的なものに区別されるというものである。とりわけ、前者は数学における「一であること」のように、それ自体は論証されずとも容認されるべき原理である。[9] これらの区別の特徴として、論証を通じて「何であるか」を明らかにするという彼の探究論の観点から全ての定義が規定されていることが分かる。十分に議論が展開し、定義と論証との関連が実現されることが示されている。

先に引用したように、(2)に関する説明としてアリストテレスは「何であるか」と「何故にか」との同一性を述べている。そしてこの同一性を説明する仕方で「同じ説明言表が異なる様式で語られる」と述べられていたのだが、「同じ説明言表」がいかなる考え方であるのかについてのさらなる理論的説明は見られない。果たして、特定の定義と論証が同じ語の要素を持つことが二つの探究の重なりを示すという具体的な観点から語られているに過ぎないのだろうか、それともともっと理論的な背景があったのであろうか。私は以上見たような彼の探究論がどのような議論から展開されて来たものであるかを、B3-7について特にB4-6に焦点を当て、次に検討したい。単に具体的事例の一般化というだけではなく、何か拠り所となるような概念が見い出されていたのかもしれないからである。一つの手がかりは、先に探究ルートの新たな表現としてあらわれた「本質to ti ēn einai」という概念である。またさらに、B1-10の議論を区分し特徴付けることによって、かの同一性を考える足がかりを得たい。

4　探究論の伝統的枠組

B3-7では、定義と論証の関連をめぐって議論が展開される。議論の出発点としてアリストテレスはひとつのアポリアを挙げる。「果たして定義によって知ることと論証によって知ることとは同じことであり同じものに即しているのかそれとも不可能であるのか?」というものである。彼はこのアポリアに対して、定義と論証それぞれに固有な働きを認めることを通じて考察を進める(90a36-90b3)。

「何であるか」は定義によって明らかにされ、論証は事物があるということを中項を通じて証明する。だが、論証はどのような仕方で「何であるか」と関わるのか。アリストテレスはB4-6において、当時の状況の中で有力と思われる探究理論を吟味する。その箇所における重要な特徴は、第一に「本質 to ti ên einai」という表現が導入されることである(91a25)。「そこで、『何であるか』は、固有なものであり、『何であるか』において述語付けられる(91a15-16)[10]。」「何であるか」が本質 to ti ên einai として理解され、固有性と類を持つことが確認されている。また、B4冒頭で「何であるかの推論や論証はあるのかそれともないのか(91a12-13)」と問われることから、「何であるか」の知識獲得のための実質的な方法が求められている。注目すべきは、この問題軸がアリストテレス自身の着眼点であるばかりではなく、当時の状況の中で既に共有されていた点であるということである。以下で見るように、おそらくはアカデメイアにおいて伝統的であった方法が持つところの共通の課題なのである。すなわち、論証によって定義を確立し、「何であるか」の知識を捉えようとするアカデメイアに共通の関心がアリストテレスの議論を方向付けていたことが見て取れる。

吟味されるのは、クセノクラテスに帰せられる[11]「本質 to ti ên einai」の推論と「分割法」である。前者の方法は次のようなものである。

［前提］魂は自らにとって自らの生きることの根拠である。
［前提］自らにとって自らの生きることの根拠は自らを動かす数である。
［結論］魂は自らを動かす数である。

(91a37-91b1)

ここでは、「何であるか」を結論に置いて証明しようと企てられている。もしこの考え方が適切なものであるならば、「何であるか」が論証されることになり定義と論証の関連が実現されることになる。しかし、アリストテレスはこの方法を、「ロギコス推論 logikos syllogismos」と呼び、探究のためのひとつの方法であることを認めながらも(B8,93a9-13)、論点先取の故に「論証ではない」と批判している（B4,91b9-11)。というのも、この推論は同じものから同じものを導いているからである。B6においては、前提を仮定することによって、本質を先取しない意図を持つ推論が紹介されるが、中項を通じて結論を導く論証の本性から、仮定によるものも結局は右の本質の推論と同じ形式を持つことになる。

また、「分割法」は問答の中に置かれ、問い手の分割に答え手が応答することを通じて、事物の特徴が秩序正しく明らかにされてゆく方法である。例えば人間について、「動物」の特徴を分割し、答え手によって「陸棲」「有足」「二足」等の特徴が選び取られてゆく。そして、最終的にはこれらの特徴が組み合わされる仕方で、当該事物に固有な説明を与えることが企てられる。しかし、この方法は「推論ではない」としてアリストテレスによって批判され、知識をもたらす方法として見なされないことになる（91b12)[12]。本質の推論も分割法も論証ではないが故に、探究理論の基盤になり得ない[13]。「何であるか」の推論の企図については、否定的な結論が導かれることになる。

このようにB3-7の議論の特徴は、アリストテレスが当時の研究動向を捉え、先行研究を批判的に吟味していることである。B7においては、「何であるか」と「何を意味するか」が明確に区別されることを通じて、当時の定義論の限界が

明らかにされる。すなわち、定義は存在を開示しないということ、さらに定義項と被定義項との同義性を説明できないということである。というのも、何らかの説明言表が定義として与えられたとしても、常に「何故？」と問われ得るからであり、それに対して適切に応答するということは論証を持つということだからである。そこで、「何であるか」の知識を求めるアリストテレスの探究論はこれら定義論上の困難を解決しなければならないのだが、既に見たように、定義が論証との関連を持つ仕方で確立されることによって、彼の探究論は構築されるのである[14]。

以上、B1-10の議論をたどってきたが、その議論全体から同一視の主張を捉えるために、当該文脈を三つの相として区別し特徴付けておきたい。

アリストテレスはB1-2において、『後書』B巻の導入部にふさわしく豊富な具体例と共に自らの探究論を導入し、探究の実践レベルにおいて議論を展開している。後続するB3-7は「何であるか」の知識を獲得する方法の吟味を中心として、定義と論証にまつわる了解事項の確認と、従来の定義論が抱える問題の析出を特徴とする。言わば、探究論を構築するための課題が、伝統的枠組のレベルにおける議論を通じて提起されているのである。また、B8-10は、アリストテレスの探究論が積極的に展開される箇所であり、自らの論証理論にもとづいて定義論が確立される。

そこで、B1-10の議論は、探究論構築という問題軸にそって連続的でありながらも、三つの相を持つものであると私は考える。すなわち、探究の実践レベル（B1-2）、伝統的枠組レベル（B3-7）、アリストテレスの探究論レベル（B8-10）の三つである。そして「何であるか」と「何故にか」との同一性はこれら三つの相が展開する局面において主張されており、中項の探究という特徴付けとの間に微妙な位置の違いが生じているように思われる。というのも、中項という三段論法的概念が端的に想定され得るのは、彼の探究論レベルにおいてのみであり、その他の相を持つ議論においては、たとえ具体例の中に見い出され得るとしても、すべての事例に対して前提とされているわけではないからである。私は最後に、三つの相から同一性の主張と中項の探究との関連を考察したい。

5　探究論における問いの意義

「何であるか」と「何故にか」との同一性は主張される箇所に応じてそれぞれの仕方で説明を受けている。すなわち、B2では「月蝕」や「調和音」という具体例によって示されているが、B8では「何らかの根拠があること」、B10では「同じ説明言表」という表現によっていっそう理論的な背景を感じさせる。それでは、後二者の間にはどのような違いがあるだろうか。

アリストテレスによれば適切な論証は根拠を根拠として示し、われわれに学問的知識を与えるような推論である。そこで「何らかの根拠があること」という表現が、論証の成立に拠り所となる観点を与えていると見ることは自然であろう。適切な論証が成り立つためには、その対象となる事物そのものの側に、根拠―帰結の関係がなければならない。しかしながら、先に引用した箇所に見られるように、（第一格）論証導入に際しては、当該事物とは別の論証可能な根拠であることという制限が施されることによって、その適応領域が確立されながらも、反面、根拠概念にもとづいてなされる主張は制約を受けていることになる。このような制約は、探究の中で問いと応答との適切な結び付きに焦点を当てたときに要請されるべきものである。すると、この制約の中で想定される問いというものは常に適切な応答をもつものに限定されるということになるのだろうか。むしろアリストテレスは、何であれ問うことというわれわれの営みの中で応答を持つ領域を確立していると思われる。

一般に、疑問文というものが何を指し示しているのかということは必ずしも明らかなことではない。だが少なくとも「何であるか」および「何故にか」という直接疑問による表現は、次の二つの特徴をもつだろうと思われる。すなわち、問いに対する応答としての具体的な説明言表を一般的に表現することと、明らかにされるべき理想的な応答のための指

標としての説明言表を端的に表現することである[15]。これらは等しく探究の到達点を意味するだろうが、前者がひとつの探究という営みに終止符を打つものであるのに対し、後者はむしろそこへと向かう探究の動機付けとなるだろう。とりわけ、後者の視点は伝統的枠組レベル（B3-7）の議論を通じて分節されるようになったと私は考える。というのも、探究目標という理念が、それに至るための従来の方法の吟味を通して、アリストテレスとアカデメイアの人々との間に共有されているからである。実際、本質の推論や分割法が論証構造を持たないにもかかわらず探究理論と見なされ批判の対象となり得るのは、「本質 to tiēn einai」を探究目標とし事物について学知を求めるという理念による共通の問題軸がアリストテレスによって理解されていたからだと思われる。したがって、根拠のあることが同一視に対して説明となり得るのは、本質概念をアリストテレスもまた共有しているということの想定があるからこそであろう[16]。

また、B10 における「同じ説明言表」という説明項は、先に述べた直接疑問形式が少なくとも持つ二つの特徴を統合するような仕方で表現されている。つまり、事物のあり方とわれわれの認識とが理想的に結びついている観点を表わしているものと思われる。そのとき、「同じ説明言表」という表現が指示しているのは、一方では探究目標としての本質であり、他方では探究によって獲得される個々の説明言表であろう。これが定義と論証としてアリストテレスの探究論の立場から分節されるのである。すなわち、彼の探究論レベルから観れば、同一視の主張は学知を求める限りにおいて実現されるものであり、探究を中項の探究と解釈することにもとづいて理解されるものであると思われる。

したがって、探究の実践レベルにおいてはこれらの視点が反映されるだろう。というのも、アリストテレスの探究論はわれわれの探究一般に対して与えられるものであって、彼の探究論を理解する者だけが探究しているわけではないからである。

かくして「探究されるものは全て、中項の探究である」という考え方と、「何であるか」と「何故にか」との同一性との関連を理解することができる。

同一性主張は、既に区別した三つの相に即して主張されており、どの相においても認められるものである。そこで、アリストテレスの探究論レベルにおいては、全ての探究を中項の探究と特徴付ける彼の考えにもとづいて同一性主張が理解される。われわれが学問的知識を求める限りにおいて「何であるか」と「何故にか」とは同一視されるべきなのである。だが他方で、伝統的枠組レベルにおいては同一性主張が探究論構築に際して重要な枠組となるが故に、彼の探究論に論証が導入され中項の探究という理解が可能になるのである。そしてこのことは、議論の循環を示すものではなく、アリストテレスが自らの探究論における定義や論証の意義を明確にし、探究論上重要な考え方を洗練させて行くプロセスの反映なのである。

6　結論

以上から、全ての探究を中項の探究と理解するアリストテレスの考えと、「何であるか」と「何故にか」との同一性という主張の関係が理解されたこととしたい。探究目標あるいは理想的到達点という理念と、そこに至るための実質的な手段としての論証と、どちらがいっそう基礎的なものであるかということは、議論の相に即して理解されながらも、循環ではない仕方で、相互に密接に関連しながらアリストテレスの探究論構築のプロセスに寄与していると言えるだろう。彼が『後書』A巻において議論している論証理論は、探究論の構築を可能にする枠組であったとしても、それはさらに探究の到達点としての本質という考え方を共有する伝統的枠組の議論を通じてこそ、探究論において十分に機能することが理解されるのである。

注

1　W.D.Ross, L.Minio-Palluello, *Aristotelis Analytica Priora et Posteriora.* Oxford,1954.

2　B3,90a35-36. Cf. B2,90a5-6.

3　B2,90a14-15. Cf. B2,90a31-34; B8,93a3-4; B10,94a6-7.

4　アリストテレスにとって、全ての適切な論証は知識をもたらすが、全ての知識が論証を持つとは限らない（A4,71b16-19; A3,72b18-20)。

5　存在と「何であるか」が段階的に明らかにされると考えるときには、探究者が対象に関する様々な特徴を既に集めており、それらのうちどれが事物の存在にとって第一の根拠を与えるかを比較する余地があると思われる。他方で同時に把握される場合というのは、様々なデータの比較検討というプロセスなしに、第一の根拠を射当てるという事態であろう（cf.『後書』A34)。

6　アリストテレスは『後書』A13において「事実の推論 ho syllogismos tou hoti」と「理由の推論 ho syllogismos tou dioti」として、われわれの認識にもとづいて存在を証明する前者と、実在の持つ根拠―帰結の構造を捉えることによって根拠を特定し存在を確立する後者とに区別している。

7　B10 における定義の区別が三種類であるか四種類であるかについて、研究者の間で論争がある。ロスは語の意味を明らかにする定義を論証の結論としての定義と同一視し、定義は三種類であるとしている(W.D.Ross, *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, p.634-5,(Oxford, 1949))。だが、近年では四種類の見方を取る見解が有力であるように見える。特に、チャールズはアリストテレスの意味論を詳細に論じ、語の意味を明らかにする定義の固有の特徴を明確にすることを通じて、定義の四種別を確立している(D.Charles, *Aristotle on Meaning and Essence*, chapter2-3, (Oxford, 2000))。

8　アリストテレスにとって「何を意味するかti sêmainei」の説明言表は、対象の存在を含意しない(B7,92b4-11)。この種類の定義は、或る説明言表が当該事物についてのものであるということを明らかにする。例えば、もし「中心から等距離にある点にもとづく平面図形」が「円」の定義であるならば、その説明言表が「山銅」についてのものではなく、まさに「円」についてのものであることを指し示す。

9　例えば「一であることは量に即して不可分なものであることである」(cf.72a22-23, Charles, *Aristotle on Meaning and Essence*,p.46,(Oxford,2000)).

10　「『何であるか』において述語付けられる en toi ti esti kategoreitai」というアリストテレスの表現は、『トピカ』においても見られるものであり、「類 genos」が語られていることを示している(『トピカ』 A5,102a32-35, cf. Chiba, *Aristotle on Explanation:part II , appendix*,(北海道大学文学部紀要40-2,pp.1-95,1992))。

11　W.D.Ross, *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*. p.618.

12　cf.『分析論前書』A31,R. Smith, *Aristotle Prior Analytics*. p.160,(Indianapolis, 1989).

13　分割法については『後書』B13,14においてその有効性が論じられることになる。

14　cf. 千葉恵『アリストテレスと形而上学の可能性』p.240-241,(勁草書房2002)

15　後者については、われわれが応答困難な事柄に対しても実際に問うということがあるという事態をも私は想定している。応答としての全ての説明言表は問いを含意するが、全ての問いが応答を持つとは限らないであろう。

16　アリストテレスにおいて「本質 to ti ên einai」という概念は難解なもののうちの一つであるが、少なくとも私は『後書』において語られる場面にのみ目を向けて、ここでは「事柄そのもの」という意味で理解したい。「類」と「固有性」を持つものと理解されていたことから、とりわけ分割法との深い関係を持つ概念である。

Inquiry and Demonstration

— Aristotle's *Posterior Analytics* B1-10 —

Daisuke HIYOSHI

In *Posterior Analytics B1-10,* Aristotle constructs *theory of inquiry,* which has two crucial theses: (a) "everything which is inquired is the inquiry into *a middle term*" and (b) "what it is and why it is are the same." These are concerned with *definition* and *demonstration.* Then I will show how the relation between (a) and (b) is, while he seems to put them as mutually dependent conceptions in the relevant context. I distinguish B1-10 into three phases: *phase 1*;practice of inquiry (B1-2), *phase 2*; traditional framework (B3-7), *phase 3*; his theory of inquiry (B8-10). These three phases, I think, reflect on the relation between (a) and (b), and provide us backgrounds of the construction of the theory. Especially, phase 2 maintains the balance of definition and demonstration in the beginning of B8 on the basis of a traditional concept; essence.